

〈実践報告〉

「芸術表現演習Ⅱ（音楽）」授業の中から  
「子供の音楽劇の表現」  
一二つの練習課題から音楽劇の表現に必要な様々な要素を学ぶ

豊田千晶

音楽は幅広い年代において、共に楽しみ、コミュニケーションをとることの出来る表現である。例えば、皆で手拍子を打つという表現だけでも、リズム・速度を合わせるという協調の意識が必要である。

この授業では、音楽の表現の中でも特に多くの要素を含む「音楽劇の表現」について学ぶことを目的としている。教材には子供向けの歌唱教材を選び、各自が学んだ「音楽劇の表現」が子供の音楽劇の指導につながることを目指している。

音楽劇の表現に含まれる多くの要素として、具体的にはリズム・声・せりふ・歌詞・歌唱・演技・振り付け・構成・演出等が挙げられる。そして、ここで求められる良い表現とは自分の表現したいこと（自分の思うこと・自分の感情）を伝えることが出来る表現と言える。

例えば「せりふ」を例にとると、せりふの棒読みではその内容や感情を伝えることは出来ない。言葉の発音・せりふの速さ・声の高さ・声の強さ・抑揚など、それぞれに適切な表現が必要である。さらに劇中では、せりふを言う相手に対して、顔の表情や顔と体の向きも表現の大切な要素である。つまりそれぞれの要素を知り、その表現力を磨くことが、良い表現につながるのである

この実践報告では、音楽劇の表現の実習の中から、様々な表現の例を挙げる。

以下、実習の内容をⅠ初期の練習課題 Ⅱ音楽劇に発展させるための課題 の二つに分け、順を追って述べる。

## Ⅰ 初期の練習課題

「おばけなんてないさ」 作詞 榎みのり／作曲 峯陽

選曲の理由 ・小学校の音楽の副教材にも選ばれており、よく知られている。

- ・歌唱音域が1オクターブ以内で歌いやすく、短い曲である。
- ・感情の表現がはっきりしていて、表現しやすい。

「おばけなんてないさ」1番の歌詞

おばけなんてないさ おばけなんてうそさ  
ねほけたひとが 見まちがえたのさ  
だけどちょっと だけどちょっと ぼくだってこわいな  
おばけなんてないさ おばけなんてうそさ

## 実習の方法

### 1 音楽練習

楽譜を配付し、皆で斉唱する。記憶違いによる食い違いを避けるため、楽譜上で確認し統一する。

日本語の特徴を説明し、(子音と母音の関係・発音を明確にする必要性)発音に気をつけて聴き取りやすい歌い方を意識する。

### 2 振り付け練習 その1 音楽のリズムを感じる練習

最初は簡単な振り付けをこちらから指定する。4拍子のリズムに合わせて体を動かし、リズムを体で感じるための振り付けである。この曲の場合、何も指定せず初心者の学生に振り付けを考えさせると、一様に「おばけ」はお化けのポーズ、「ないさ」は手を横に振る「無い」のポーズに偏ってしまう傾向があり、リズムを体で表現する振り付けが出来なくなるためである。

指定する振り付けは前奏2小節を含み、直立してかかとで拍子をとる、足踏み、ボックスステップ、手を振る等一度で覚えられる程度の簡単なもの。お化けの表現は一切入れず、リズムを感じ、但し動きながら歌詞をきちんと歌うことを目標にする。

簡単な振り付けでも、動きながら歌うと歌詞(特に子音)が不鮮明になりがちなので、体に馴染むまで繰り返す。全員で輪になって(又は向かい合って)お互いを見ながら、簡単な振り付けでも皆で揃えることの楽しさを味わう。

### 3 振り付け練習 その2 振り付けを創作する練習

グループ分けを行い(1グループ5名~8名程度)各グループで自由な振り付けを考える。お化けのポーズは入れても良いが、リズムを楽しめる振り付けにするよう指示する。並び方は自由とし、2列での動きやペアでの動きも良いと伝え、その場合の簡単な動きのパターンを見せる。

今回は後奏の4小節を加え、最後に皆で同じ方向に向かって「最後のポーズ」を決める。つまり、最後だけ客席に向けた振り付けにすることで、観客に見せる意識を持たせる。

完成したらグループごとに発表し、お互いに鑑賞し、感想を伝える。

同じ曲でも様々な振り付けが完成し、興味をもって他のグループを鑑賞することが出

来るようになり、自然と拍手が湧くようになる。音楽を共に楽しめる感覚を味わうことが出来、次の段階へ向かう意欲も見られるようになってくる。

「最後のポーズ」



「おぼけなんてないさ」は1年間の授業の最後でも実習する。曲中のステップや客席への意識等、1年間で学習した内容が活かされていることを実感できる。

#### ○次の課題に入るまでの練習

毎回の授業の最初に、簡単に出来るリズムゲームや言葉ゲームなどを行い、まず楽しい環境を作るようにしている。このゲームは簡単には出来るが、皆で揃えて行ったり、スピードアップさせたりする場合には緊張を必要とする。全員で出来るようになったところで更に発展させ、集中力も維持できるよう努めている。このゲームをコミュニケーションゲームと名付けており、音楽に限らず、人の集まる場所では皆の緊張を解き、楽しい雰囲気を作ることに活用出来るものである。



コミュニケーションゲームの例  
体で文字を作る 皆でA



ハンドベル（タッチ式）ド～ソ  
ドレミパイプ ド～ソ

実習したコミュニケーションゲームをまとめたものを1年間の最後に配付しており、これらのゲームを将来に活用して欲しいと考えている。その中で音楽・音楽劇に直接に関係するものとしては、ドレミパイプの紹介、腹式呼吸の紹介、滑舌の練習、童謡に合わせたポーズ作り、ツーステップの様々なパターン、などがある。

また、1～2コマの課題として「ドレミの歌」や「ミッキーマウスマーチ」、「森のくまさん」、「きらきら星」等を題材にして歌唱練習の他、ハンドベルや子供用のリズム楽器（鈴・タンバリン・マラカス・クラベス・木魚など）の実習や各種のステップやステップを取り入れた方向転換などを練習し、これらを使った振り付け練習も行っている。



ステップ練習



## II 音楽劇に発展させるための課題

「11ぴきのネコ」合唱版 作詞 井上 ひさし／作曲 青島 広志

- 選曲の理由
- ・ 戯曲家として多くの秀作を生んだ井上ひさしさんを紹介する。
  - ・ 青島さんの音楽が楽しく、多くのリズムパターンが含まれている。
  - ・ 登場人物（ネコ）の数が11人以上、出演者の人数が調整しやすい。
  - ・ 1曲ずつが短く、歌詞も平易で分かりやすい。
  - ・ それぞれの曲について、自分たちでソロや合唱等のパターンを考えることが出来る。
  - ・ 全18曲の中から曲を抜粋することが出来、曲の間にせりふを入れて物語を構成することが出来る。
  - ・ 練習する曲を増減することが出来、時間の幅も自由がきく。

### 実習の方法

- 1 音楽練習 最初に「11ぴきのネコが旅に出た」を題材として選び、楽譜を配付する。
  - ・ 楽語の習得 見開き2ページの曲であるが、よく使われる音楽用語（楽語）や繰り返し記号などが多用されており、読譜力を養うことが出来る。
  - ・ 歌唱練習、プロンプターの練習

この曲は短い歌詞の羅列が多く、楽譜を見ながらであれば歌いやすいが、実際には暗譜しにくい曲でもある。歌う際に、次の歌詞の直前に歌詞を伝える（プロンプター）練習を行う。プロンプターは、メロディーは知っていても歌詞があやふやな場合に有効な方法である。しかし、言葉伝えるタイミングを的確に行うことは難しく、お互いに順番で行うことで相手に伝える難しさやプレス（息継ぎ）の位置を再確認することが出来る。



プロンプター練習

「11ぴきのネコが旅に出た」歌詞の前半部分

11ぴきのネコ 11ぴきのネコ 11ぴきのネコが旅にでた … A部分  
みんなネコネコ 鼻をヒコヒコ 腹はペコペコ だけどニコニコ … B部分  
山をノコノコ 丘をトコトコ しっぽピコピコ 湖どこどこ 以下略

## 2 振り付けの練習

- ・ B部分の歌詞に合わせた振り付けを、1人ワンフレーズずつ考えて、それぞれの動きをつないでいく。輪になってお互いに動きを確認しながら、タイミングや角度を合わせていく。
- ・ ある程度出来た段階で、A部分とその前の前奏部分の動きをこちらから提示する。  
この部分の動きはそれまでの授業で学習したステップや並び方を使い、客席を意識した観客に見せるための振り付けとして行う。
- ・ 後半部分の歌唱練習を行い、振り付け担当者を決めて振り付け練習を行う。



「11ぴきのネコ」振り付けのワンシーン

## 3 音楽劇への発展

### その1 選曲

「11ぴきのネコ」の中から1曲目の「にゃあごろソング」と2曲目の「のらネコ暮らしの是非についての問答歌」を選び歌唱練習を行う。

その2 おおまかな物語と出演者のキャラクター設定を考える。

オープニング音楽「にゃあごろソング」～ せりふ …ネコたちが集まってくる… ～ 音楽「のらねご暮らしの是非についての問答歌」～ せりふ …より良い生活を求めてネコたちは旅立つ… ～ 音楽「11びきのネコが旅に出た」

### その3 せりふの作成

- ・物語の流れとキャラクター設定をふまえたせりふを作る。
- ・読み合わせを行い、せりふの内容を表現出来るように練習する。

### その4 立ち稽古 全体に動きをつけ、音楽の振り付け・せりふとその間の演技の練習。

- ・振り付けは、音楽それぞれに担当者を決めて動きを作っていく。
- ・動きが再現できるように動きの記録を楽譜に記入する方法を学習する。  
立ち位置や体の向き、立ち座りなどを自分なりの記号を使って記録し、練習中に素早く判断し対応出来るように工夫する。
- ・おおまかな全体の流れを作ってから、最初に戻り細部の練習を積み重ねる。

### その5 発表会

- ・発表会においては、具体的な準備（会場の設営や楽器や小道具の運搬等）や広報など、舞台で見えること以外にも多くの大切な作業を経験することが出来る。
- ・衣装や小道具も工夫が出来れば、より効果的に見せることが可能である。
- ・対象となる観客の層により、音楽劇の時間を増減することも必要である。  
また、幼児や低学年の観客の場合、言葉のスピードや目線の位置など、適切な表現が変化することを学ぶことが出来る。

### まとめ 良い表現に向けて

良い表現とは、自分の思うこと、表現したいことが相手に伝わる表現である。自分が心の中で思っても、それを表現として伝えなければその内容は伝わらない。相手（観客）に伝えるためには、自分を客観的に観察し、自分の表現の技術を向上させていかなければならないのである。

指導者は音楽の楽しさを伝えるためにも、表現の技術の向上に向かって適切な指導が出来るよう、多くを経験し学んで欲しいと願っている。

### 参考文献

- 鴻上 尚史（2005年）『表現力のレッスン』 講談社  
鴻上 尚史（2002年）『発声と身体レッスン』 白水社  
絹川 友梨（2002年）『インプロゲーム』 晩成書房  
竹内 敏晴（1990年）『「からだ」と「ことば」のレッスン』 講談社